

て居ります。

次には薄弱兒童轉地療養所、つまりこれは夏の間だけ體の弱い子を海岸なり山間なりに避暑に連れてゆくやうにしたいのでありまして、今年の夏から行ふ手筈でしたのが、準備が間に合ひませんでした。來年の夏からはきつと行ひます。

大正婦人會託兒所

主任 佐伯富士子

近頃貧民階級の住して居ります町々に、託兒所が澤山出来ましたが、其の中でもこの芝區新網の託兒所は貧しい子供の託兒所として最も色彩の濃いものでございませう。

新網に足を入れたことのない方々は、想像も出来ないかも知れませんが、本所深川あたりの労働者町はこれほどもないやうに思はれます。此處に住んでゐる人々は、工場に通ふ人々は上等でありまして、乞食をしてゐたり、縁日に三味線を弾いて歩きまわる人や、どんづきに出かける女等の類であります。一戸をかまへてゐる人々は、ともかくも生活してゐま

巡回看護婦を雇ひまして、中産階級以下の各家庭を訪問し、疾病其他の事故者あれば、適當な注意と處置を與へ、主として乳兒幼兒の保健的教養に努力させるつもりです。

この外に兒童保護の宣傳をし併せて本會の事業を發表する機關雜誌を發行したいと思つて居ります。

すが、同居人といふものが、一番仕末におへないのでありまして、四疊半に三組の夫婦が居る、昨日まで二階にゐた夫婦者は今日は居なくなつて、他の者が這入つてゐる、といふやうに、實に變化極りないものであります。

このやうな家庭から來るのでありますから、託兒所に通ふ子供も、千差萬別であります。雨の降る日は親達が労働を休みますから、子供も家に引どめられて十四五名しか参りません。天氣の日は三十六七人通つて参ります。子供達は、實に亂暴で、お行儀が悪く、言葉つかひの下品なこと、中々教へ導くの

に骨が居れます。

私共の所では、純然たる託児所といふのではなくて、幼稚園をかねて居るのであります。新網小學校といふ特種小學校が、すぐ附近にありますので、其の小學校と連絡して、託児所といふ名ではあります。が、幼稚園の教育を授けることにしてございます。亂暴で、仕附けの悪い家庭から、直ぐ小學校へと進めるのは、此の邊の子供にとつては餘りに、急な變化を子供の生活に與へ、其の他に小學校の先生方も餘計なお骨折をしなければならぬやうになります。子供たちの爲め先生方の爲にこの二つの理由から、私共の託児所では、幼稚園をかねた仕事も致して居るのでございます。

この託児所は一昨年生れましたので、ございませすが、その以前には、特種小學校へ通ふ子供達が、妹をつれ、弟をつれ、赤ん坊を負んぶして、教室へのぞみましたので、並大抵では學業を授けるのが困難な上に、そのお伴して來る子供達がざわ／＼して、とても學校らしい教授が出來なかつたさうで、小學校の先生方も大層お困りになつて居られました。ところがこの託児所が生れましたから、小學校へ行く

子供が、朝、妹弟と一緒に連れ來て夕方は歸りがけによつて連れてかへる、といふ風で、大層よくなりました。

託児所の子供達は、手工をさせましたり、遊戲や唱歌を教へましたり、時々は面白い、子供の爲になるやうなお話をしてやります。氣が荒くて、少しの落附きもありませんから、初めの中は、一定の時間に手工をさせたり、皆そろつて唱歌をさせたりするのが中々うまくありませんでした。そして家庭に歸つてしまふと、此處で教へてやつた言葉つかひもからつと忘れてしまつたり、又母親達もこんな事を教へてくれるのかい、等と言ふものですから、子供もその氣になつて出席しなくて困りました。

然し此の頃は、大層よくなりました。それも、託児所が設立されてからまる二年も経ちましたからでございます。

私共は、家庭改良と云ふ事を、根本的事業である、つく／＼感じました。其の日の生活に困らず、相當の教養があつて正しく生きてゆく中流、上流の方々が、一ヶ月もこの邊の貧民の家庭に浸つてごらん下さい。彼等は、なんとした怠け者であるか、恥

をしらないか、又其の日の米代さへあれば明日のことは考へずに遊び歩いてゐるかが、よく御解りになりますませう。

月に一回、夜の會といふものがありまして、いつも五十人位が集ります。蓄音機を聞かせ、茶菓を出して、御機嫌を取るやうにして、會へ出席することを奨励してやります。家庭の身の上相談のやうなものにも、絶えず訪問して相談相手となつてやり、子供の誕生と戸籍のことや、又お金に困つてゐる人々等、一々世話をして居ります。

私共の事業ももつと、資本をかけて充分やりたいと存じて居ります。この託児所が創立したてには、諸方から寄附がありましたので、子供達にも毎日おやつを與へることが出来ましたが、近頃は其やうな道も絶えてしまつて、子供等におやつをやることもしません。子供達は馴れて愉快に暮して居ります。

又唯今迄、私と一緒に保母としてこの託児所に働いて居た方が、縁談の爲め歸國しましたので、私一人になりました。どうしても、私一人では多忙でしかたがありませんから、若い婦人の方で獻身的にこの事業に働くといふ方があれば、好都合と望んで居

ります。

相手ほしや、

義三さんは七つになりました。このごろの晴天つゞきの毎日を遊び相手としては、近所の進さん(六歳)一人です。朝早くから日かげる迄、二人に何とかして遊んでゐます。幸、車馬の通らない家の前を二人は我がものにしてその道に塵を敷いてみたり、三輪車を走らせて見たりしますが、たつた二人で、それも毎日同じ遊び相手とて、直きに飽きて來ます。「母さんお菓子頂戴……」と遠くの方から言ひながら支那にかけてつづけることが三十分毎におこります。ある時はお隣の壺所口をのぞいて「小母さん！あそびませう」と相手をもとめ、一寸お母さんの目をぬすんでは二階の窓から抜け出て屋根に上つてゐます。「まだお晝ぢやないのか」と朝飯のすんで、やつと一時間とたゝぬ間にはやお晝飯をまちます。

* * * * *

幼稚園に通つてゐたらば、……と二人を見ることに私はさう思ひます(丁子)